



Data

監督・脚本：ホン・サンス
 出演：キム・ミニ/ソ・ヨンファ/
 ソン・ソンミ/キム・セビョ
 ク/イ・ユンミ/クォン・ヘ
 ヒョ/シン・ソクホ/ハ・ソ
 ングク

👁️👁️ みどころ

キム・ギドク監督亡き今、「うまい、安い、早い」の“吉野家”路線を貫くホン・サンス監督に注目！キム・ギドク監督もベルリン、カンヌ、ベネチア国際映画祭の常連で3冠王も達成しているが、それはホン・サンス監督も同じ。ベルリン国際映画祭では、銀熊賞の主演女優賞、監督賞、脚本賞の3冠を！

キム・ギドク監督は“鬼才”らしい“問題提起”と“ドギツさ”が特徴だったが、ホン・サンス監督作品は男女の恋愛をネタにした会話劇で紡ぐ他愛のない(?)ものばかり。

そんな映画のどこが面白いの？そんな疑問もあるが、イヤイヤそれが面白い。しかして、本作の面白さは？

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■ホン・サンスがベルリンで銀熊賞（監督賞）を！■□■

キム・ギドク監督亡き今、私が韓国で最も注目している超個性派監督がホン・サンス監督。男女の恋愛を会話形式で描くその独創的なスタイルは唯一無二のもの。彼が手掛けるのはすべて現代劇だから時代劇のような大規模なセットや衣装はいらないし、大量のエキストラを動員することもなく、カメラで会話劇を撮影するだけだから、制作費は超安いはず。したがって、ホン・サンス監督作品の最大のポイントは、監督の脚本と演出の狙いを会話劇の中で完璧に表現する俳優の存在と演技力だが、今や公認の不倫相手にもなった(?)女優のキム・ミニの起用が軌道に乗ってからは、スイスイと何作も。

キム・ギドク監督はカンヌ、ベルリン、ベネチア国際映画祭等の常連で、世界三大映画祭すべてで受賞するという快挙を成し遂げているうえ、『嘆きのピエタ』（12年）（『シネマ31』18頁）は第69回ベネチア国際映画祭で韓国映画初となる金獅子賞を受賞している。それと同じように、ホン・サンス監督もカンヌ、ベルリン、ベネチア国際映画祭等

の常連だ。私は『それから』（17年）（『シネマ42』285頁）、『クレアのカメラ』（17年）（『シネマ42』290頁）、『正しい日 間違えた日』（15年）（『シネマ42』294頁）、『夜の浜辺でひとり』（17年）（『シネマ42』299頁）の4本を鑑賞しているから、『逃げた女』が公開されたと聞くと、こりゃ必見！

ホン・サンス監督は特にベルリン国際映画祭と相性がよく、①2017年の『夜の浜辺でひとり』で第67回ベルリン国際映画祭の銀熊賞（主演女優賞）を、②2020年の本作で、第70回ベルリン国際映画祭の銀熊賞（監督賞）を、そして、私はまだ観ていないが、③2021年公開の『Introduction』で、第71回ベルリン国際映画祭の銀熊賞（脚本賞）を受賞しているからすごい。

キム・ギドク監督の映画製作スタイルは、吉野家と同じように「うまい、安い、早い」だったが、全て脚本も兼ねているホン・サンス監督の映画作りもそれと同様で、とにかく早い。本作は24本目だ。本作では監督、脚本の他編集、音楽も手掛けているから、その多才ぶりは顕著だ。『逃げた女』というタイトルは一見ヒッチコック風（？）だが、さて、女は一体誰から逃げてきたの？また、それは一体なぜ？

■□■会話の相手役は3人の女。それぞれの会話のテーマは？■□■

ホン・サンス監督作品はすべて会話劇で構成されているし、その会話のテーマはすべて男女の恋愛。その会話の一方はホン・サンス監督のミューズたるキム・ミニだが、そのお相手は？私がホン・サンス監督作品として最初に観た『それから』には、本作の終盤にチョン先生役で登場する男優、クォン・ヘヒョが主人公として登場し、彼とキム・ミニを含む3人の女性との会話劇がストーリーを構成していた。

それに対して本作は、ソウルで花屋を営んでいる主人公の女性、ガミ（キム・ミニ）が翻訳家である夫の出張中に、友人の女性3人を訪問する中で展開する3人の女との3つの会話劇がストーリーを構成する。最初の物語は、車に乗ったガミが郊外の瀟洒な一戸建てに住むかつての先輩、ヨンスン（ソ・ヨンファ）を訪問するシークエンスから始まり、ガミとヨンスンの会話からストーリーが始まっていく。そこでの同居人の女性、ヨンジ（イ・ユンミ）を含む会話劇は如何に？

■□■最初のヨンスンとの会話は？こりゃ一体ナニ？■□■

久しぶりに再会した女同士の会話は、ガミがお土産に持ってきた肉を焼きながらの会話。それは、互いの近況報告や訪問した家の誉め言葉等々、他愛もないもの（？）ばかりだが、どこかがかみ合っていない感も・・・？ヨンスンはこの立派な郊外の家を元夫から獲得した金で購入したそうだが、鶏が鳴いているから、ここはかなりの郊外。また、なぜかガミの訪問中、近所に引っ越してきたという男性（シン・ソクホ）がヨンスンとヨンジが飼っている猫を「妻が怖がっているので餌を与えないでほしい」、と苦情を言ってくるが、これって一体何？ホン・サンス監督のカメラはそんな会話や行動の一部始終（？）を様々な角度から撮影していくが、とりわけ目立つのが、玄関の監視カメラ越しの映像。ホン・サン

ス監督はなぜそんな映像にこだわるの？

また、面白いのは、なぜかその日ガミがヨンスンの家に一泊すること。久々に訪問した先輩の家だとしても、一泊するほどの関係なの？しかも、ヨンスンから夫との結婚生活について聞かれたガミは、「夫と毎日一緒にいます。離れるのは今回が初めて」としゅあしゅああと答えていたのには、アレレ……。その上、ソファの上でなかなか寝付けられないガミは、寝付けられないまま防犯カメラの映像をのぞき込んでいると、そこには隣人の不幸な境遇の若い女性を慰めるヨンスンの姿という、何とも訳のわからない映像が。こりゃ一体ナニ？そもそも、この家の構造と敷地は一体どうなっているの？

■□■ 2番目のスヨンとの会話は？ ■□■

ガミが2番目に訪れるのは、ピラティスのインストラクター業で貯金を蓄えているという独身女性のスヨン（ソン・ソンミ）。“ピラティス”と聞いても私には何のことかわからなかったが、これは体幹やインナーマッスルを安全かつ効率よく鍛えることができるエクササイズのこと、ヨガや筋トレとは違う効果があるらしい。したがって、そのインストラクターをしているスヨンがスーパーモデル並みの体形を誇っているのは当然だが、それ以外にも、スヨンは今借りている人気の高いエリアにあるマンションの補償金を大家さんから1億ウォン（約1000万円）も負けてもらったと自慢しているくらいだから、その性格はサバサバしたものだ。

彼女は今も創作舞踊の活動をやっているから、芸術家関係の付き合いが多いらしい。「こんな立派な家に住み、使えるお金がいっぱいなんて羨ましい」。ガミは自由な生活を謳歌しているスヨンをそんな風にほめながら、スヨンが作ったパスタを食べ、白ワインを飲んでいたが、そこでもガミが「夫と5年間の結婚生活で離ればなれになったのは今回がはじめて」、「彼の考えなの。愛する人とは何があっても一緒にいるべきだって」と、のろけるからアレレ。ところが、ここでは、それに呆れながらもスヨンも自分の男関係を次々と“自白”していくから、それに注目！

それによると、このマンションには芸術家が多く、スヨンはすぐ上の階に住む建築家に胸をときめかせているらしい。さらに、ここでも思いがけない訪問者がチャイムを鳴らし、スヨンは玄関の外で対応していたが、ガミがここでも防犯カメラでその一部始終を観察していると、この若い詩人（ハ・ソングク）は今、ストーカーのようにスヨンに付きまとっているらしい。しかし、この男を追い返した後のスヨンの“告白”を聞いていると、彼とは飲み屋の帰りに一夜限りの行きずりの肉体関係を持ったというから、アレレ。久しぶりに先輩に会って会話をしただけで、女同士の会話はこんなところまで進展するの？ホン・サンス監督は一体どんな想像力をたくましくしてこんな脚本を書いているの？

■□■ 3番目のウジンとの会話は？ ■□■

1番目のヨンスンも2番目のスヨンも、ガミが久しぶりに先輩の家を訪問した時の会話劇だが、3度目の女性、ウジン（キム・セビョク）との会話は、ミニシアターが併設され

たカルチャーセンターに立ち寄ったガミがカフェで偶然このセンターで働く同世代の旧友ウジンと再会した時のもの。最初の会話も2番目の会話も、女同士の会話の割にはどこかぎこちないもの、どこか不穏なもの(?)があったが、3番目の会話を聞いていると、ガミとこのカルチャーセンターで働いているという同世代の女性ウジンはどうも、1人の男性を巡ってもめたことがわかる。つまり、ウジンはかつてのガミの恋人を略奪婚しているわけだ。

テーブル上のコーヒーを挟んでぎこちない雰囲気が漂う中、ウジンは「なんて言ったらいいのかわかんないけど、本当にごめん」と謝罪したが、それが何を謝罪しているのかはこの会話劇をスクリーン上で鑑賞している私たち観客が想像力を巡らせていく他ない。ウジンの謝罪に対しガミは「余計なことを考えてるのね。気にしないで・・・私はほとんど覚えてないの」と事も無げな顔で返していたから、なるほど、なるほど。しかし・・・。

ミニシアターでの映画の鑑賞を終えたガミは今度はオフィスでウジンと話し込んだが、そこでの話題は、もっぱらガミの元恋人で、今はウジンの夫になっているチョン先生(クォン・ヘヒョ)についてのものだ。このチョン先生を演じているのが、『それから』や『夜の浜辺でひとり』に出演していたベテラン俳優、クォン・ヘヒョだが、チョン先生は一体どんなシークエンスで登場してくるの?ウジンがガミから略奪婚したチョン先生は、たびたびTVにも出演している人気作家だが、ウジンは夫がテレビやインタビューで同じことをしゃべるのが嫌でしょうがないらしい。そのため、「同じ話の繰り返しに本心なんてありえない。それって変よ」と批判するし、夫への不満をガミにぶちまけていたから、アレレ。

他方、自分の夫について聞かれたガミは、ここでもヨンスンやスヨンに話したのと同じように、「彼とはいつも一緒だ」と答え、「彼が言うには、愛する人とは絶対に一緒にいるべき。それが自然だって」とのろけていたから、これもアレレ。女同士の会話って一体どうなっているの?そんな全くかみ合わない女同士の会話の後、ウジンと別れたガミは喫煙所でチョン先生とばったり鉢合わせするが、そこで交わされるガミとチョン先生との会話は?

■なぜ『逃げた女』というタイトルに?なぜ銀熊賞を?■

韓国は今、2017年5月9日の大統領選挙で保守党(ハンナラ党→セヌリ党→自由韓国党)の朴槿恵第18代大統領から政権を奪取した「共に民主党」の文在寅大統領の任期が1年を切る中、次期大統領の選挙をめぐる大混乱に陥っている。文在寅大統領の支持率の低下の要因は不動産価格の急騰だが、そんな失政の原因はどこに?そんな現状に照らせば、ヨンスンもスヨンも郊外とはいえ立派な家に住んでいることに驚かされる。そこに車で訪問するガミの姿と翻訳をしているというガミの夫ののろけ話を聞いていると、ガミは今どんなところに住んでいるの?そんな興味も湧いてくるが、そこを一切見せないのがホン・サンス監督の脚本の面白さだ。

ガミと3人の女たちとの会話劇を見ていると、ガミはチョン先生をウジンに略奪婚され

た後に翻訳家の夫と結婚しているはずだが、本作を鑑賞した後もさっぱりわからないのは、なぜ本作が『逃げた女』とタイトルされているのかということ。英題の『The Woman Who Ran』も韓国語の原題も同じらしい。本作のガミとヨンスン、スヨンとの会話劇には防犯カメラが重要な小道具にされているが、それ以外に、郊外の家の窓から見える郊外の美しい山の風景も“何か”を物語っているらしい。また、ミニシアターでガミがスクリーンを見ている風景は映画製作のテクニックとしてよく登場するものだが、私たちがそこでガミと共にスクリーン上で見るのは美しい海と浜辺の風景だ。しかし、これも一体何を意味しているの？

本作は徹底した会話劇だが、ホン・サンス監督の脚本でも演出でもそれらの点は全く語ってくれないから、それらすべて1人1人の観客が自分の頭で考えるしかない。多分その正解はないのだろうが、なるほど、ホン・サンス監督作品は面白い。キム・ギドク監督作品はこれからは観られなくなったが、ホン・サンス監督作品はこれからも次々と期待したい。

2021（令和3）年7月2日記